

平成31・令和元年度佐賀県立伊万里商業高等学校(伊万里実業高等学校商業キャンパスを含む) 学校評価結果

| | |
|--|--|
| <p>1 学校教育目標 生徒一人ひとりの『生きる力・生き抜く力』を育み、社会経済情勢の変化に十分に対応しうる、社会人・商業人としての資質(知識・技能)を身につけさせ、社会に貢献できる心身ともに健全な生徒の育成を目指す。</p> | <p>2 本年度の重点目標 《知徳体の調和》をスローガンとして、10年後、20年後の生徒たちの姿を想像し、社会貢献ができる人間性豊かな生徒の育成を目指す。 ①集団生活の中で、相互に理解しあう心を醸成し協調性を高める。 ②基礎学力の向上に努め、思考力・判断力・表現力を磨き、進路実現100%を目指す。 ③保護者や地域に対する情報公開を進め、連携を密にすることにより、地域の期待に応えうる、魅力と活気に満ちた学校づくりに努める。 ④部活動や資格取得において、目標に向かって努力し成し遂げることの充実感、成功体験を実感させることにより、将来に夢と希望を抱く生徒を育てる。 ⑤新しいものを創造するとともに、来るべき社会の構築に積極的に参画できる生徒を育成する。 ⑥校舎制による円滑な学校運営を行う。</p> |
|--|--|

3 目標・評価

①集団生活の中で、相互に理解しあう心を醸成し協調性を高める。

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 | 具体的な改善策・向上策 |
|-------|---------------|---|---|--|--|--|--|
| 教育活動 | ●心の教育 | スクールカウンセラーの活用 | ・カウンセラー事業を通して、生徒一人ひとりの心のケアを実施することにより、誰もが安心して生活を送れる学校環境を実現する。 | ・年間62時間のカウンセリングの時間を確保し実施する。また、それに付随するものとして、教育相談職員のカounseling技術・能力の向上を目指す。 | A | カウンセリングが計画されている時間帯はほぼ埋まり、数多くの生徒の対応をしていただいた。また、教職員に対して別室登校の生徒やいじめ問題に対する的確なアドバイスをしていただき成果を上げている。 | ・事例等を使ったスクールカウンセラーによる職員研修を実施し、最新の情報を取り入れ生徒との関わり方に役立てる。 ・スクールカウンセラーの役割とその重要性を職員が深く認識するためにも、カウンセリングを受けている生徒の現状を職員に伝える報告会を定期的に設ける。 |
| | | 人権・同和教育の推進 | ・豊かな人権感覚を身につけた生徒育成のために、環境づくりや研修計画を立てる。 ・他を認め合い、差別を絶対に許さないという人権教育を行い、生徒一人ひとりの進路保障へつなげる。 ・職員・生徒向けの研修会を各学期に最低でも1回以上行う。 ・職員向けの研修会として、伊西地区の夏季研修会の参加率100%を目指す。 | ・各教科で人権感覚を養うような授業づくりを工夫する。 ・年間計画に位置づけて研修会を実施する。 ・夏期研修については、全職員参加を義務づける。 | B | ・計画していたHR活動、講演会は予定通り実施できた。感想文からも人権意識が身につけているのがみとれた。 ・職員の研修参加も計画通りだったが、校内での研修が十分ではなかった。 | ・職員会議後に研修を計画することで、教職員の人権意識の高揚につなげる必要がある。 |
| | ●いじめ問題への対応 | いじめを許さない体制作り | ・「いじめは、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識を持ちながら、生徒の安心・安全を図る。 | ・毎月一回実施している「いじめ」に関するアンケートにより、いじめ問題に対する意識の啓発を図る。 ・「いじめ」は、絶対に許されない行為であり、どの生徒にも起こりうる問題であるという職員間で認識を持ち、保健部や各学年等と連携を図りながら、情報交換を行う。 | A | ・毎月、生徒に対するいじめアンケート、7・12月に保護者へのいじめアンケートを実施することができた。早期のいじめの発知を心掛け、「いじめ」を覚知した場合には、いじめ防止対策委員会を開き、情報を共有するとともに、深刻ないじめの早期解決に努めた。 | ・アンケートの利用を通して、学年主任・担任その他の職員によるきめ細かい観察により、生徒の異変を早期に発見し大きな事態になる前に解決することが大切である。 |
| ○生徒指導 | 心身ともに健全な生徒の育成 | ・生徒一人ひとりが主体的に、規律やマナーを守り、他者を思いやり、心優しい生徒の育成を図る。 | ・防犯講話、交通講話等を実施し、規範意識を持ち、公共や他者のために自主的に行動できる人づくりを目指す。 ・SNS等での友人トラブルをなくすため、ネットマナーについて講話を行う。 ・各学年や関係部署と連携を図り、問題行動などの未然防止に努める。 | A | ・防犯講話は9月19日(木)に、NTTドコモ九州の安全教育担当者に依頼して実施した。 ・交通安全講話は7月9日(火)に、伊万里警察署交通課の担当者に依頼して実施した。 ・薬物乱用防止は12月5日(木)に、第一薬科大学に依頼して実施した。 | ・防犯講話は、以前は警察署の生活安全課に依頼していたが、この2年間はネット社会でのトラブルが増しているため、「情報モラル」教育に重点をおき、SNSなど危険予知策などについて講師を依頼している。昨年度はLINE株式会社にも依頼したが、PTA総会で生徒と保護者の両方のもとにこの講演を実施したら、今まで以上に効果があると思われる。このことは、今から必要とされる、他者を思いやる心の教育にも繋がる。 | |

②基礎学力の向上に努め、思考力・判断力・表現力を磨き、進路実現100%を目指す。

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 | 具体的な改善策・向上策 |
|--------------------------|---|--|---|---|--|--|--|
| 教育活動 | ●学力向上 | 基礎学力向上 | ・年間計画に基づき、国語力、英語力向上のための小テストを実施する。 ・自宅学習時間を確保する指導を行う。 ・ICT機器を使った授業を推進する。 | ・年間計画に基づいた小テストの試験範囲を生徒に示す。 ・事前指導に力点を置き、事後指導を受ける生徒を極力減らす。 ・ICT機器を使い、より一層生徒に興味関心を持たせられる授業ができるよう研修の機会を設ける。 | A | ・国語テストの年間満点者は30人、英語テストの年間満点者は48人であり、昨年度より7人増加した。各クラスの平均点も20点満点中18点以上であり、基礎学力の向上につなげることができた。 ・ICT機器の活用についても、電子黒板の有効的な活用が各教科で検討され、授業に反映されていた。 | ・国語・英語の2教科に加え、計算等の基礎学力向上にも力を入れていきたい。 ・ICT機器の活用について、定着してきたが、常に研鑽を積んでいけるよう、研究会等を検討していきたい。 |
| | | 読書活動の推進 | ・読書の習慣を身につけさせる。 ・生徒一人当たりの貸出し数を6冊以上に上げる。 | ・朝の読書タイム(15分)を前年度より5分延長する形で実施。情操教育の一端を担い加えて知識見分の向上に役立てる。 ・図書館だよりを毎月発行し、読書への動機付けとする。 | B | 5分の延長となった読書タイムであったが多くの生徒が集中して取り組むことができていた。図書館だよりの発行も予定通り行えた。 | 特に改善すべき点は無いと考える。現行のままのスタンスを崩すことなく継続していくことが重要と考える。 |
| | ○進路実現に向けての各学年の取り組み | 1学年 学年目標の設定 学校生活全般 | ・規律ある生活習慣の確立を目指す。 ・学力向上のため家庭学習の徹底と積極的な資格取得を目指す。 ・就業意識と進路意識の啓発を図る。 | ・毎日の学校生活の指導において、規律を意識させ、礼儀やマナー、遅刻・欠席等について適切な指導を行う。 ・家庭学習の定着のための指導を適宜行う。 ・授業に対して積極的に取り組むよう指導を行い、テスト等の事後指導も適宜行う。 ・大学訪問、企業訪問を実施し、時期に応じた進路情報の提供と指導を行う。 | B | ・普段の生活から、規律や礼儀、マナー等を意識して生活させ、基本的な生活習慣の確立に向けての指導については、学年全体で取り組むことができた。 ・調査前の特別指導等、個別に指導すべき生徒については、適宜指導を施した。 ・進路意識向上に向けてのLHRや大学・企業訪問等を進路指導部と協力して計画し、実施できた。 | ・今年度同様、規律や礼儀、マナー等の基本的な生活習慣の確立に向けての指導については、徹底して指導を継続する。 ・自分の進路に向けた学力的な対策を早期に意識させ、それぞれに必要な資質の向上を図る。 ・1年次に取り組んだ進路情報の収集をもとに、インターンシップやオープンキャンパス等を通して、自分の進路について明確な目標設定を行う。 |
| 2学年 学年目標の設定 学校生活全般 | ・規律ある生活習慣の確立と社会適応能力の向上を目指す。 ・学習活動をはじめとする学校生活全般の活性化を図る。 ・個に応じた進路指導を行い、明確な進路目標を持つ。 | ・日々の生活面の指導の中で、規律を内面化させ、特に挨拶、返事の徹底をはかる。 ・上位層には高いレベルの進路意識、下位層には諦めない心を持たせて学習に取り組ませる。 ・インターンシップへの取り組みを通じ、将来の人生ビジョンを明確にし、実践的な能力を養う。 | B | ・挨拶返事、各種課題への取り組みなどへの意識は高まったが、立ち止まり礼、家庭学習の定着など、一段高いレベルまで到達していない。 ・インターンシップ、学校研究を経て、具体的な進路希望を考慮させることができたが、実現への具体策は明確になっていない。 | ・就職、進学へ向けての面接練習、集会や個別面談などを通して、礼儀などへの意識と普段からの行動の質の向上を図る。 ・進路に応じた試験対策、個別の作文、小論文指導などを通し、それぞれに必要な学力、資質の向上を図る。 | | |
| 3学年 学年目標の設定 学校生活全般 | ・進路達成100%を実現する。 ・夢実現に向けて、ひたむきに努力し、最後まであきらめない生徒の育成に努める。 ・最高学年としての自覚を持ち、勉強・行事・部活動等に全力で取り組む。 | ・卒業後の社会人や上級学校での学生としての自覚を持てるような指導を工夫する。 ・クラスや学年全体の雰囲気作りを重視し、何事にも熱心に取り組めるような環境づくりをする。 ・進路指導・学習指導・面談を常時実施し、進路計画に基づき、主体的な学習習慣の確立を図る。 | B | ・進路指導部との連携により、日々の進路指導を丁寧に行った結果、就職率98.3%、進学率100%の進路達成率であった。 ・生活習慣の定着から自覚を認識させることで、規範意識の向上につながった。 ・社会人としての心構えに関する講習を通して意識が高められた。 | ・進路指導部との連携により、生徒の適性に応じたきめ細かな進路指導を継続的に行う。 ・早期の目標設定を掲げ、クラス全体で進路達成に向けて雰囲気高める。 ・社会人としての心構えを身につけさせるために、服装・マナー指導を定期的に行う。 | | |

③保護者や地域に対する情報公開を進め、連携を密にすることにより、地域の期待に応えうる、魅力と活気に満ちた学校づくりに努める。

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 | 具体的な改善策・向上策 |
|------|-------------|--------------------|---|---|-----|--|--|
| 教育活動 | ○地域・保護者との連携 | 地域への積極的な参加 | ・将来、伊万里を支える人材を地域と連携して育成する。 ・さがを誇りに思う教育推進事業を活用し、ふるさとの良さを生徒に実感させる。 | ・地域のボランティア活動へ積極的に参加する。 ・授業の中に地域との結びつきを取り入れ、自らの具体的目標を定め、年間を通して活動する。 ・地域商店街等と連携して販売実習を行う。 | A | ・さがを誇りに思う講演会では、地元伊万里の活性化をテーマとし、NPO法人まちづくり伊万里の理事長を講師として招聘した。生徒たちは地域との結びつきを強く感じることができたようだ。 ・地元商店街とのタイアップで販売実習を行い、空き店舗の活性化にも貢献できた。 | ・ボランティア活動については、農林キャンパスとの合同実施を検討していく。 ・販売実習についても、地域や農林キャンパスと連携しながら進めていく。 |
| | | PTA活動の充実 | ・PTA活動を通して、保護者と学校の連携を図る。 ・PTA総会出席率90%以上を目指す(2次総会含む)。 | ・PTA行事や各種会議に、積極的に参加していただくように努める。また、PTA新聞等で活動を紹介する。 ・PTA総会案内は再案内を出し参加を促すとともに、メールでも参加を呼びかける。 ・欠席者のための2次総会も計画する。 | B | ・PTA総会は、82.8%(2次総会含む)で目標を達成できなかった。 ・伊万里実業PTA準備委員会を設置し、R3年度に向けて、行事、活動内容の検討を行っている。 | ・伊万里農林PTAと協同し、伊万里実業高校のPTA組織の構築を図る。 ・年間活動を精査し、活動の充実を図る。 |

| ④部活動や資格取得において、目標に向かって努力し成し遂げることの充実感、成功体験を実感させることにより、将来に夢と希望を抱く生徒を育てる。 | | | | | | | |
|---|--|---|---|---|--|---|---|
| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 | 具体的な改善策・向上策 |
| 教育活動 | ●志を高める教育 | 部活動の活性化 | ・部活動を通して、人間形成を図るとともに、生徒の自己目標達成に向けての様々な指導の工夫を実践する。 | ・全員部活制の実施により、より多くの生徒に様々な経験の場を与える。 ・学習と部活動の両立を図りながら、部活動の実績を大いに評価し、達成感を味わわせる。 | A | ・全員部活制ということで、部活動を通して様々な経験を積むことができていた。思いやりの心や礼儀やマナーといった接遇面での教育にも大きな効果をもたらしている。 | ・伊万里農林との学校再編に伴い、同じ部活動の統合も順良であり、うまく運営できている。その中で、全員部活制を継続し、より一層充実した部活動の実践が可能となるような体制を整備していくことが重要な課題である。 |
| | | 資格取得指導 | ・全商簿記検定2級全員合格を目指す。 ・日商簿記2級10名以上合格を目指す。 ・ビジネス文書検定合格率80%以上を目指す。 ・珠算電卓検定合格率90%以上を目指す。 ・経済産業省ITパスポート合格者15名以上を目指す。 | ・時代が求める教科指導ができるように、まずは教師が個々のスキルアップに努め、指導力の向上を図る。資格取得の意義を明確に理解させ指導にあたる。 ・簿記会計科目のTTによる指導、早朝や放課後の補習、長期休業中の特課・補習を実施する。 ・情報処理の高度資格取得に向けても年間指導として、早朝や放課後の補習、長期休業中の特課を充実させる。 | B | ・全商簿記検定1級、情報処理検定1級、商業経済検定の合格率は芳しくなかった。年々問題の難易度が上がっていることもあり、県内の他の高校でも同様であった。それ以外の検定合格者は、概ね数値的に目標を達成できた。 | ・問題の難度が上がっているため、教師はパターン学習の指導より考えさせる指導を重視する。 ・毎回の授業を重要視し、生徒の理解度を確保するための確認テストを定期的に実施する。 ・家庭学習を定着させるために、適切な量をもって課題を準備する。 ・検定指導に対する教師の意識を統一する。 ・充実した指導ができるよう教師の打ち合わせの時間を定期的に設ける。また、指導力向上のために研修会等にも率先して参加する。 |
| | ●健康・体づくり | 健康管理 | ・日々の生徒の自己管理に努める。 ・感染症予防対策に努める。 ・食育の推進。 | ・生徒自身が健康について理解し、自己管理ができるように指導する。 ・流行性感染症の予防のための予防接種を受けることを勧める。 ・毎月の「伊商生お弁当の日」を実施することにより、「食」を通して、健康や身体、調理技術を学び、家族と触れ合う機会を増やす。 | A | ・感染症流行時のマスクの着用や修学旅行前の2年生のインフルエンザワクチン接種率はかなり高く予防に対する意識が高かった。 ・お弁当の日の取組みも定着し成果が表れてきた。 ・薬剤師の指導のもと教室内の二酸化炭素濃度検査等の科学的な測定、検証ができた。 | ・基本的な生活習慣の確立が健康維持につながることや生活習慣病との関連について個別指導も含めて正しい知識を提供していく。 ・食育、健康づくり教材として今後も電子黒板を活用していきたい。 ・ゴミ箱の撤去等を通して、環境衛生についての理解を深めさせていきたい。 ・感染症対策については、流行期に最新情報を発信し、感染予防を呼び掛ける。 |
| 体力の向上 | ・体育理論や保健の授業を通して、トレーニング等によって体力を高めることの意義について理解させる。 | ・毎時間、授業前のランニング(体育館5周or駅伝コース1周)を徹底させる。さらに、種目にあったトレーニング(2種類)を意識して行わせる。 ・健康・安全に留意しながら、体力の向上を目指す生徒を育成する。 | A | ・毎時間、授業前のランニングを自主的に行わせ、体力の向上に向けての取組を継続して行うことができた。 ・各運動種目に応じたトレーニングを生徒自身に計画させ、準備運動後に行うことによって、その運動に適した体力の向上を意識した取組とすることができた。 | ・生徒の体力向上に向けた状況をデータ等で分析し、それに適した対処をその状況に応じて実施する。 ・体育理論を通して、体力向上に向けての合理的な動きを理解させ、実践させる。 ・個々のアドバイス等、個別指導をさらに充実させる。 | | |

| ⑤新しいものを創造するとともに、来るべき社会の構築に積極的に参画できる生徒を育成する。 | | | | | | | |
|---|----------------|--------------------|---|---|-----|---|--|
| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 | 具体的な改善策・向上策 |
| 教育活動 | ○実社会に対応できる人づくり | インターンシップの推進 | ・インターンシップを通して、キャリア教育を実践的に学ぶ力を養う。 ・自分の特性を考え、将来の進路について自ら課題を設定し、解決する能力を養う。 ・「働く」ということについて様々な角度から意識を高める。 | ・外部講師による事前指導(講話・実技指導) ・セルフプロデュースでの実施 ・就職希望者による伊万里管内の企業での実施 ・事後指導としてのインターンシップ発表会の実施 | A | ・外部講師による事前指導を行い、インターンシップへの心構えとマナーを身に付けることができた(6/20) ・自ら事業所との調整などを行い、主体的な活動ができた。 ・伊万里、西有田地区の22事業所の協力によって、有意義に実施することができた。 ・クラスごとに発表会を実施し、インターンシップの成果等を発表することで、勤労観を深めることができた。 | ・受入事業所の確保については、生徒の進路希望先と関係する受入事業所を確保するために、これまでの受入実績のある事業所だけでなく、関係諸機関(市役所等)の協力を得る必要がある。 ・事後指導として、インターンシップ発表会だけでなく、受入事業所からの講話などを行い、「働く」ことについて、さらに考える機会を設ける必要がある。 |
| | | 職業観・勤労観の醸成 | ・商業教育を通して得た知識や技能を元に職業観の育成を図る。 ・校内外での諸活動を生かした勤労観の育成を図る。 ・外部講師の講演やインターンシップを通して、職業観や勤労観を深める。 ・校内における進路行事を実施し、進路意識の高揚を目指す。 | ・外部講師によるインターンシップ事前指導(2年:6月) ・進路講演会(1・2年:7月) ・インターンシップ(2年:8月) ・進路啓発研修(企業・上級学校見学)(1年:10月) ・進路報告会(1・2年:12月) ・校内進路ガイダンス(1・2年:2月) | A | ・各学年と連携を取り、計画どおり実施することができた。 ・1年生を対象とした、上級学校見学(11/15) ・キャリア教育の一つとして位置づけた2年生就職希望者にインターンシップ(8/5-7) ・就職や進学が決定した3年生10名による進路報告会(12/12) ・1・2年生を対象とした進路ガイダンスの実施(2/20) | ・キャリア教育がより充実するような学年ごとのプランを策定する必要がある。そのためには各学年と連携を取り、学年に応じた適切な指導を計画する。 ・職業観・勤労観を早期に確立させるために、早期に職業研究などを行い、その意識を啓発することが必要であると考える。 ・個々の生徒の進路に対応した体制の維持が必須であり、全職員で指導に充てる。 |

| 特定課題 | | | | | | | |
|------|--------------------|--------------------|--|---|-----|---|--|
| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 | 具体的な改善策・向上策 |
| 学校運営 | ○校舎制に係る学校運営 | 授業の円滑な実施 | 両校舎を移動して行う授業では、出欠管理、成績管理など連携を取りながら行う。 | ・フードビジネス科については、両校舎に正副担任を配置し適宜連絡を取りながら生徒管理や成績管理を行う。 | A | ・週1回移動伴うフードビジネス科の授業であったが、学年団が密に連絡を取り合うことができた。 | ・校舎間の移動を伴うためフードビジネス科の生徒への連絡等は迅速に行う必要がある。 |
| | | 学校行事の円滑な実施運営 | 一体感の醸成ができるような行事内容に取り組む。 | ・両キャンパスの管理職間の打ち合わせは月2回以上の実施(ICT機器利用も含む)及び担当者同士の打ち合わせを密に行い、学校全体としての取組となるようにする。 | B | ・管理職間の連絡連携はよくなった。月2回以上の実施には至らなかった。 | ・両キャンパスのPTA合同の協力体制のもと、学校行事を行う。 |
| | | 部活動の円滑な実施運営 | 両校舎にある部活動が一体となって活動できることを目指す。 | ・可能な限り活動場所や指導体制を統一し、一体感のある練習ができるようにする。 | A | ・部活動毎に練習場所決め、両キャンパスで一体となった練習ができた。 | ・両キャンパス統一した部活動費の支出内容の基準作りが急務である。 |
| | | 校務分掌の円滑な実施運営 | 両キャンパスの分掌ごとに同じ業務ができるように連携を密に取る。 | ・分掌内の業務分野は両キャンパスで可能な限り統一し、2度手間にならないように電話やPCを用いて連絡を密にとって業務に当たる。 | B | ・分掌毎に連絡を取り合い、協議しながら業務にあたることができた。 | ・齟齬がないように両キャンパス間の連絡は一同に会することも必要である。 |
| | | 校舎間移動の円滑な実施運営 | スクールバスの利用や直接現地集合など適宜最良の方法で行う。 | ・フードビジネス科は曜日を固定して終日一方のキャンパスで学校生活ができるように時間割を組む。 ・全校生徒の校舎間の移動に関しては、スクールバスを活用する。 ・部活動の練習場所等の移動に関しては、生徒の安全面を第一に考え、スクールバスを積極的に利用させる。 | A | ・部活動や学校行事でのスクールバスの活用はよくなった。生徒利用の把握の方法をICカードを用いられるように検証できた。 | ・安全面からも正確な乗車把握ができるように、ICカードを活用する。 |
| 学校運営 | ●業務改善・教職員の働き方改革の推進 | 業務改善のための工夫と働き方改革推進 | ・月平均80時間超の教職員数を昨年度同月よりも削減を目指す。 ・各月の時間外平均時間を昨年度同月よりも10%削減を目指す。 | ・各分掌は、削減目標を数値化し実行する。 ・定時を過ぎるような会議設定等は行わない。 ・学校閉庁日を4日間設定し、この間は部活動等は原則行わないこととする。 ・週休日の試合等の引率は出張扱いとし、振替休日の取得を可能な限り行う。 | B | ・昨年度同月と比較して時間外平均時間の削減にはつなげられなかった。 ・学校閉庁日や定時退勤推進日の設定、振替休日の取得は可能な限り行うことができた。 | ・部活動方針の徹底を図る。 |

●は必須項目、○は特定課題

4 本年度のまとめ・次年度の取組

○いじめ事案については件数も昨年度よりは多くあったが、撲滅に向けて小さな情報も見逃さずスクールカウンセラーとも連携し迅速にかつ丁寧に対応できた。安全安心な学校生活を送ることができるようにするために、教職員が率先して対応していかななくてはならない。

○再編統合1年目であり、両キャンパス連携を取りながら学校運営を行ったが、一体感の醸成については、再編前の高校も存在することから配慮をしながらの学校行事となった。両キャンパス統一の基準はあるものの、運用については詳細を詰める必要があることもわかってきた。

○来年度は、全日制では再編前の高校が3年生のみの在籍となり、伊万里実業高校生が過半数を占めることになる。従来の取組だけを引き継ぐだけでなく、新高校の魅力づくりとして、両キャンパスの良さを尊重しつつも新たな取組も必要である。